珠玉百歌仙

塚本邦雄

毎日新聞社

昭和二十四年十二月十五日發行

著者　島田謹二　吉田精一

發行者　横須賀市逗子町二〇一番地　濱田隆一

印刷者　千代田區神田錦町二の二　日海印刷株式會社

發行所　横須賀市逗子町二〇一番地　天明社

出張所　東京都千代田區神田神保町三ノ二　振替東京一一四一番

島田謹二――東北大英文學科卒。東大教養學部教授・商大・立教大講師。著書・ボーとボードレエル・臨海樓綺譚

藤村名詩鑑賞

本書は著者と發行者の諒解により檢印しない

定價150圓

地方賣價160圓

吉田精一――東大國文學科卒・紅陵大教授・東大・教育大講師・著書、明治大正文學史・文藝學論考・芥川龍之介・永井荷風・日本近代詩鑑賞（明治・大正・昭和）

序

日本の近代文學は、島崎藤村の詩によつて、その曙を告げられたといつても過言ではあるまい。藤村の詩は、實に時代の青春の歌聲でもあらう。

私達はここに手をたづさへて、この藤村の歌に分けいり、その意味をさぐり、その味をこまかにしらべて見ようと思ひ立つた。今日の若い方々には、すでに數十年の時代の距離が、正しい味ひ方と読み方をはばんでゐるやうに思はれるからである。

私達は先づ、藤村の四つの詩集のうちから、すぐれてゐるもの、どうしても見のがすことのできないもの、藤村を知るに必要なものを選び、その解說と鑑賞とをこころみることにした。紙數の制限や、他の事情から、すべてのすぐれた作品を選ぶわけには行かなかつたが、これだけでほぼ、詩人藤村の性格や、その表現の技巧や、目のつけ所などを知るには十分だと考へてゐる。

執筆者の一人である吉田は、すでに藤村の代表作である「秋風の歌」や「千曲川旅情の歌」「思より思をたどり」の三篇を、この同じ出版者の手で、『近代詩鑑賞明治篇』にのせて、世

に贈つた。しかしこれらの篇は「藤村名詩鑑賞」と題する以上、省けないものである。そこでこんどは、これらの諸篇を島田が執筆して、別の角度、別の見方から、解説をこころみることにした。吉田の著書で読まれてゐる方方にとつても、更に深く、又廣くこれらの名作を見直す機會をもたれることとなつて、くらべ読まれれば別種の興味があらうと思ふ。

島崎藤村といふ近代の大作家の輪廓について、一應知つて置きたいといふ希望に副ふ爲に、吉田の手になつた「島崎藤村の生涯と藝術」及び「年譜」をつけ加へることにした。前のものは、藤村の故郷に近い木曾福島に於て、一昨年秋、藤村についての記念講演を頼まれた時の講演原稿であつて、わかり易く、この作家の一生と、主な作品を解説しようとしたものである。その人生苦難をふみこえた、たしかな足どりと眞摯な生き方は、私達にさまざまな暗示を與へてくれるものと信じてゐる。

私達はこの書が、何等かの意味で、若き人々の情操をうるほし、感情を豊かにし、詩や文藝の性質について樂しみつつ知識を得られるたすけになることをこひねがふ。

昭和二十四年秋十月

島田謹二
吉田精一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

序のうた……一
初戀……八
おえふ……一七
おさよ……二九
秋風の歌……四四
哀歌……六五
傘のうち……八〇
潮音……九〇
鷲の歌……九四

晩春の別離……一一五
千曲川旅情の歌……一三八
思より思をたどり……一四九
吾胸の底のこゝには……一五七
吾戀は河邊に生ひて……一六六
君こそは遠音に響く……一六九
こゝろをつなぐしろかねの……七五
風よ靜にかの岸へ……一八三
椰子の實……一九三
島崎藤村の生涯と藝術（吉田精一）……二〇八
年譜……二四四

序のうた

心無き歌のしらべは
一房(ひとふさ)の葡萄のごとし
なさけある手にも摘(つ)まれて
あたゝかき酒となるらむ

葡萄棚ふかくかゝれる
紫のそれにあらねど
こゝろある人のなさけに
蔭に置く房の三つ四つ

そは歌の若きゆゑなり
味ひも色も淺くて
おほかたは嚙みて捨つべき
うたゝ寢の夢のそらごと

題名にもあるやうに、この詩は明治三十年に出版された『若菜集』の序の歌として卷頭に掲げられた。『若菜集』は當時未だ暗中模索時代にあつたわが國の詩壇に最初の光明を投じた。この後藤村は三十三年迄に『一葉舟』『夏草』『落梅集』の三詩集を出版し、これらは『若菜集』と共に、わが國の近代詩を藝術的に完成した最初のものとして忘れることのできない詩集である。さて

心無き歌のしらべは
一房の葡萄のごとし
なさけある手にも摘まれて
あたゝかき酒となるらむ

といふ歌ひ出しは、一房の葡萄がなさけある人の手に摘まれて釀され、それを口にする人の心身をあたたかく包む美味な葡萄酒となるやうに、自分の心無き詩も、詩心ある人（それは清純な若人なのだ）に讀まれ、その人達の胸の中で、もつとすぐれた詩に生まれ代るであらう、といふ意である。「心無き歌のしらべ」は「なさけある手」に、その歌のたとへられた「一房の葡萄」は「あたゝかき酒」に對應しよう。こゝには若き藤村の、自分のさゝやかな詩に對する限りないいとほしみの情が、つゝましやかに、而も大へん清新に歌ひ出されてゐる。第四行の「らむ」といふ推量の助動詩による結びも、このやうな息吹きをよく傳へる。

葡萄棚ふかくかゝれる
紫のそれにあらねど

こゝろある人のなさけに

蔭に置く房の三つ四つ

自分の詩に對するいとほしみから、それを一房の葡萄にたとへてみれば、その葡萄の姿が浮んでくる。それは、綠の葉の生ひ茂つた葡萄棚に紫の色も豐かにふさ〳〵と（ふかくは、色も深くと、その房の長さとを云ふ）みのつてゐるやうな葡萄ではない。そのやうな目に立つ美しいものではなく、自分の詩は

こゝろある人のなさけに

蔭に置く房の三つ四つ

心ある人のなさけによつて、棚のかげのやうなところにこつそりと置かれる三つ四つの房、そのやうな葡萄なのだ。それはわづかに「心ある人」、自分に同情ある人によつてのみ注意され、摘みとられるやうなかすかにあはれな存在なのである。

そは歌の若きゆゑなり

味ひも色も淺くて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

おほかたは嚙みて捨つべき
うたゝ寢の夢のそらごと

自分の詩を葡萄にたとへると、「葡萄棚ふかくかゝれる紫のそれ」ではなくて、そのやうにさゝやかな三つ四つの房でしかないが、それも自分の詩が未熟なために他ならない。どの一粒をとつてみても、「おほかたは嚙みて捨つべき」「味ひも色も淺い」葡萄のやうに、拙い作品ばかり、それは「うたゝ寢の夢のそらごと」のやうなものだ。といふのが第三聯の意であるがこゝに至つて作者は自分の詩に對して、謙讓なことばと心をもつて臨み、その出來榮えのはかなさを感じてゐる。恐らくそれは作者自身のいつはらぬ感想をある程度迄含めてゐると見るべく、それは又おのづから青春の日の夢のかなしみでもあらう。

これらの詩句は、舊約聖書雅歌の「請ふ、なんぢら乾葡萄をもてわが力をおぎなへ、林檎をもて我に力をつけよ。」「無果花樹はその青き果を赤らめ。葡萄の樹は花さきてその馨はしき香氣をはなつ、わが佳耦よ、わが美しき者よ、起て出きたれ。」（第二章）又「われら夙におきて葡萄や芽し、苔やいでし、石榴の花やさきし、いざ葡萄園にゆきてみん。」（第七章）な

どから聯想を得たもので、聖書や雅歌には葡萄は多くうたはれてゐる。それはこの詩に西洋的な情趣のみづみづしい美しさ、清新さを添へてゐる。

以上一篇を通讀してみると、明治三十七年に出版された『藤村詩集』の「その詩は幼稚なりき、不完全なりき、されど僞りも飾りもなかりき、青春のいのちはかれらの口唇にあふれ、感激の涙は彼らの頰をつたひしなり、」「詩歌は靜かなるところにて想ひ起したる感動なりとかや。げにわが歌ぞおぞき苦鬪の告白なる、」又「わが若き胸は溢れて花も香もなき根無草四つの卷とはなれり。われは今青春の記念としてかゝるおもひでの歌ぐさかきあつめ、友とする人々のまへに捧げむとはするなり。」といふ序文と相應ずることが知られよう。たゞ「序の歌」が處女詩集出版といふ理由もあつてか、何處となくおづ〳〵したやうな感も伴ふのに對して、序文の方は藤村が詩に對する所信をはつきりと把握してゐるため、堂々と、潑溂としてゐる。しかしその內容は全く同じなのである。又この詩は五七調四行づつ三聯で、文語が用ひられてゐるがかやうな定型(自由詩に對して)で語句に主として文語を用ひて、青年の純情と情熱をつつましく調べ出すのが藤村の詩の特色である。そのため一見すれば古めかしい感じがするが、

内容は非常に近代的であることは、この作からも窺はれよう。

もし缺點を求めるなら、第三聯が少し說明的で言葉が十分こなれず、第一、二聯からみてやや調子のそこなはれた感がしないでもない。しかし全體としてみれば、これから繙かれようとする『若菜集』の序曲として、その詩句のみづみづしさ、自分の詩に對するいとほしみの純な氣持のつゝましやかなしらべは、讀者の胸に何かひゞくものがあらう。藤村の詩は果して「おほかたは嚙みて捨つべきうたゝ寢の夢のそらごと」であらうか。

〔吉田〕

初戀

まだあげ初めし前髪の
林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛の
花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたへしは
薄紅の秋の實に
人こひ初めしはじめなり

わがこゝろなきためいきの
その髪の毛にかゝるとき
たのしき戀の盃を
君が情に酌みしかな

林檎畑の樹の下に
おのづからなる細道は
誰が踏みそめしかたみぞと
問ひたまふこそこひしけれ

近代日本の抒情詩人のうちで、島崎藤村ほど清純な戀愛詩の作家はゐなかつた。これはその

時代が、戀愛を憧憬するおもむきの強かつたといふこともある。つまり現實的な戀愛よりは「戀を戀する」時代だつたのである。しかし、藤村その人の資質といふことに又大きな關係がある。藤村は内には激しい情熱のもち主であつたが、それを外にあらはすとなると、きはめて内輪に、言ひさしたままやめるといふやうな、はにかんだ表現しか出來なかつた。つつましやかな表現のかげから自らもれる深いなげきや歎息が、彼の詩の特色であつた。かうした詩情が自然女性的であることは誰にも想像しやすい。それだから、うひうひしい處女の戀心や、清らかな青年の情熱といふやうな主題は、藤村の詩に、もつとも適當なものである。

數ある戀の詩のなかでも、こゝに選んだ「初戀」は彼の第一詩集『若菜集』にのせたものでもつとも評判の高い、又内容もすぐれた作品である。私共より一時代前の人々は、この詩を諳誦してゐた人が多かつたといふ。一體藤村の詩は、一句とか一行とかには、純一な思ひ迫つた感情が美しく輝いてゐるけれども、一篇とすると、とかく形式に破れが見え、缺點ができて、破綻のない名作といふべき作品は比較的すくないのである。その中では「初戀」などは、さうした難のない稀な例である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo